

研究報告

「多文化共生論」ワークショップ報告 ～岩手県国際交流協会との協働による授業～

Workshops with Facilitators from Iwate International Association
In a “Multi-Cultural Society” Class:
A Report

吉原秋*
Aki YOSHIHARA

Keywords: Multi-Cultural Coexistence, Cross-Cultural Communication, Collaboration with the Local Community
多文化共生, 異文化理解, 地域協働

1. 本稿の目的

国際文化学科では、平成 16 年度以降、「多文化共生の中で主体的に活躍する人間」の育成を目指し、教育・研究に取り組んできた。この取組は、文部科学省の平成 18 年度「特色ある大学教育支援プログラム」(特色 GP) にも採択されている。

この流れを受け、平成 20 年度より 1 年後期の専門科目として「多文化共生論」が開講され、初年度より筆者が担当している。それ以前より、1 年前期に「国際協力論」「国際関係論」など、国際間ないし国外での、国際交流、異文化理解、およびそれらに関する活動についての授業が開講されてきた。それらに対して、「多文化共生論」は、より身近な、国内ないし地域内での異文化理解、外国出身者との交流に関わる事柄を対象とし、地域社会に関連した問題も取り扱う。

昨今の高等教育の現場では、従来型の講義形式の授業だけでなく、双方向型、学生参加型授業の活用が期待される場面が増えてきている。「多文化共生論」では、授業の目的から、学生が岩手県の現状を理解した上で、より実践的な関心を持ってもらいたいと考え、授業内容を検討してきた。その結果、開講初年度である平成 20 年度から、外部講師による実践活動の講演および筆者自身がファシリテーターを務めるワークショップを取り入れた。この方向をさらに発展させるべく、平成 21 年度は、岩手県国際交流協会主査宮順子氏と相談して、連続ワークショップを開設することとした。県国際交流協会でも、かねてから『いわて国際理解ハンドブック』¹の作成等、県民の国際理解に貢献する資料、教材を作成しており、短大生を対象に連続でワークショップを行うことによって、汎用的な教材開発に役立つ、ということである。

本稿の目的は、平成 21 年度に開設した連続ワークシ

ョップの内容を記録し、次年度以降の教育・研究に役立てることである。これは、単なる授業改善にとどまるものではなく、地域貢献的な側面も併せ持つ取組として、有意義な報告となるはずである。

2. ワークショップの概要

授業は火曜 5 限に行われ、履修者は 10 名であった。全 15 回の授業のうち、前半は筆者が講義を行い、その後、連続 6 回のワークショップを行った。最後に、学生が課外で直接参加した国際交流・異文化理解に関わる活動について、各自発表させた。

講義部分では、「文化とは何か」「異文化接触の際の課題」「日本の多文化共生をめぐる歴史と現状」「外国人集住地域の取り組みと課題」を扱った。これを受けて、ワークショップ部分では、「異文化接触の際の課題」「岩手県の現状と課題」を扱うこととし、宮氏に依頼した。

この依頼に応じて、実際のワークショップの計画が担当者を中心に立てられた。担当者は、宮氏の紹介により、前述の『いわて国際理解ハンドブック』作成メンバーにお引き受けいただいた。日ごろから、岩手県の国際交流・異文化理解に関わる活動に参加している方々で、個人としての活動のみならず、互いに連携して検討・相談しながら活動に取り組んでいる。今回のワークショップでも、実際にファシリテーターを務めたのは 5 名であるが、それ以外のメンバーも宮氏とともに授業を参観し、そこでの感想等が次回以降の授業内容に生かされていた。

講師謝金等の費用は、盛岡短期大学部と県国際交流協会とで、それぞれ 3 回分ずつを負担した。

この場を借りて、お忙しい中をご協力くださいました岩手県国際交流協会、宮順子氏およびワークショッ

* 国際文化学科講師

プに関わって下さった方々に、心から感謝申し上げます。

3.ワークショップ各回の内容

ワークショップごとに、まず内容を記す*。各回のテーマ及びワーク名は講師が付けたものである。内容については、講師が準備した資料に基づいて、筆者が要約・補足した。その後、学生が毎回授業終了時に講師に提出した「ふりかえりシート」から、学生の感想・反応を筆者がまとめたものを記す。

3-1.第1回11月17日(火)

3-1-1.内容

講師 鷹嘴洋子氏（県立高校教諭）

○導入ワークショップ¹

テーマ「異文化という概念を実感させると同時に、国際理解の授業の楽しさ、充実感を与える。」

アイス・ブレイキング・クイズ

自己紹介と〇×クイズ。

ワーク1「円卓会議」

パプアニューギニアから来た人が自分の家にホームステイすることになったとして、何を準備するか、グループごとにブレインストーミングする。

ワーク2「バフアバフア」

ブルー国とオレンジ国という、言語・価値観・行動様式が異なる二つの民族に分かれ、異文化交流のシミュレーションを行う。その結果何を感じたか、を発表し合い、さらに、お互いの感想を聞いてどう思ったか、を話し合う。

3-1-2. 学生の反応

ワークショップ形式がどういうものか知らない学生も多く、最初は驚き戸惑っていたが、すぐに馴染んでいった。ワークの感想としては、「文化に優劣はない」「自分の文化が正しく、相手の文化が間違っているということはない」という点が複数の学生から挙がっていた。また、「異文化交流の難しさ」を感じると同時に、「楽しさ」も感じたことがわかった。とりわけ、交流のための「言葉の重要さ」を強調する学生もいた。

3-2.第2回11月24日(火)

3-2-1.内容

講師 藤沢義栄氏（県内公立小学校教諭）

○導入ワークショップ 2 (上記 1 よりさらに踏み込んだ内容)

アイス・ブレイキング・ゲーム

目を閉じたまま番号を続ける。

ワーク1「ことばさがし」

ブルキナファソ（アフリカ）の写真集を見て、グループごとに読めない言語の単語の意味を考える。

ワーク2「ちがいのちがい」

「福祉」「教育」「設備」「宗教」「エスニシティ」など多岐に渡る分野で見られる違いを、「あっていい違い」と「あってはいけない違い」にグループごとに分類し、そう考えた理由を話し合う。

ワーク3「おつゆの中身」

自分の家の味噌汁の具を紹介し合い、その違いから身近な「異文化」を考える。

3-2-2. 学生の反応

メインであるワーク 2 からの感想が多く、「違い」にもいろいろあるということ、さらに「違い」が差別に繋がること、が挙げられていた。また、在日問題をはじめ知らないことが多いことへの気付きから、知らないからこそ知りたい、学びたい、という意欲が示されていた。一方で、受講生である自分たちの考え方の中にある共通性や相違性へと言及する者もいた。

3-3.第3回12月1日(火)

3-3-1.内容

講師 熱海アイ子氏（日本語支援・異文化理解ゆうの
会代表）

○地域在住外国人の現状をテーマにしたワークショップ1～一関の現状～

テーマ「外国人が身近に居住した場合の、心理や行動を考え、よりよい共生を築いていくには自分はどうあるべきかを考える。」

アイス・ブレイキング・クイズ

県内の在住外国人に関する出題の後、「岩手県市町村別国籍（出身地）別外国人登録者数」資料が配布され、宮氏から解説があった。

ワーク 1 「外国人が大勢、突然我がご近所に」

アパートの半数を南の国の出身である工場労働者の家族が占めることになったという設定で、自治会長に届いた苦情(例・「雪かきをしない」「挨拶をしない」)が日本人に当てはまるか外国人に当てはまるかを、グループごとに考え発表する。

ワーク2「マイノリティーWS」

額にシールを張った後で、声を出さずにグループに分かれる。

ワーク 1'

ワーク2で、そのような指示がなかったのにもかかわらず、色別に分かれてしまったという結果を踏まえ、もう一度ワーク1に戻り、苦情を分類し直す。

3-3-2. 学生の反応

ワーク2によって、自分たちが無意識に「見た目」

すなわち外形的に分かりやすい印で分類していることに気づき、驚いていた。そのことは、再度ワーク1に取り組んだ際に、最初の苦情分類の根拠が固定観念に過ぎなかったことに気づき、かなり分類が変わったことから、伝わってきた。そこから、異文化理解の困難さへの不安を感じる者と、改善に向けて前向きに受け止める者と、両方が見られた。

3-4.第4回 12月8日（火）

3-4-1.内容

講師 熱海アイ子氏

○地域在住外国人の現状をテーマにしたワークショップ2 ～対立から学ぼう～

テーマ「前回の活動から、異文化に触れたときの心理・行動を振り返り、起こりうる対立に自分がどう向き合っていけばよいのか、自分の感情を知り対立の解決策を考える。」

アイス・ブレイキング・ゲーム

『対立』と聞いて思い浮かべる色は何か。

ワーク1「対立について考えてみよう」

『対立』と聞いて連想する言葉を挙げた後、「対立に関する7つの概念」を読み、対立の良い点に目を向ける。

ワーク2「怒りを振り返ってみよう」

自分がある状況でなぜ怒りを感じたのかを考え、満たされないニーズの存在に気付く。

ワーク3「win-winのための交渉のロールプレー」

子どもの帰宅時間をめぐって対立する親子を二人一組で演じることによって、互いにプラスになる交渉の方法を考える。

ワーク4「いいところ探し」

受講生全員が互いを褒めるメッセージを書いていく。

3-4-2.学生の反応

対立＝マイナスと考えがちだがプラスになることが分かった、という感想が多かった。話し合いの大切さと、自分と相手の感情双方を尊重することの大切さについて言及していた。とりわけ後者については、ワーク4を体験することで「Self-esteem」の感情と行動との繋がりが実感できた模様である。

3-5.第5回 12月15日（火）

3-5-1.内容

講師 村井好子（いわて多文化子どもの教室むつみっこくらぶ代表）

○地域在住外国人の現状をテーマにしたワークショップ3 ～外国につながる子ども（児童生徒）たち～

テーマ「外国につながる子ども（児童生徒）たちについて、イメージすること、疑似体験することを通じて、多文化共生分野でのサポートについて考えるきっかけとする。」

アイス・ブレイキング・ゲーム

将来住んでみたい国の場所に、教室の床を地図に見立てて立ててみる。

ワーク1「いわての外国につながる児童とは？」

グループごとに今持っているイメージを発表した後、『日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査（平成20年度）』の結果について資料が配布され、説明を受ける。

ワーク2「疑似体験・読めない言語による算数」

グループごとに、中国語、ポルトガル語、ハンガールで書かれた算数の計算問題と文章題を解いた後、感想を発表する。解説の後、可能なサポートを考える。

3-5-2.学生の反応

言葉が通じない環境で生活することの困難さを実感していた。また、異文化とは、日本の外にあるということではなく、国内にも身近なところで存在することがわかった、という感想が出た。その上で、支援について、特別なことではなく、相手が必要としていることを考えればよい、という感想もあった。

3-6.第6回 1月12日（火）

3-6-1.内容

講師 吉田武夫氏（県立高校教諭）

○多文化共生・異文化理解を再考するワークショップ～内なる異文化と多文化共生～

テーマ「多文化共生が在住外国人との共生（内なる国際化）だけではなく、もっと広い広がりを持つものであることに気づき、多文化共生を再考する。」

ワーク1「あなたに似た人」

新しくルームシェアする相手を選ぶという設定で、グループごとにキャラクターカードに順位を付ける。一位と最下位について、どういう基準で選んだのかを発表する。

ワーク2「ほえることのできない犬」

イタリアの作家ジャンニ・ロダーリの児童文学を途中まで読み、グループごとにその後の結末を創作する。発表後、ワーク1と結びつけて、「違い」「共生」について考える。

3-6-2.学生の反応

ワーク2後のふりかえりで「違い」が障害の有無やジェンダーの話題にまで及んだことから、多文化は「身近に」「様々」にあることに言及していた。また、

自分が「当たり前」「偏見」「先入観」をもって行動していることに気づき、他者も同様であることに思いを至らせていた。「不安」を感じつつも、「一步踏み出す」ことの大事さを強調する意見もあった。

4. まとめと課題

今回のワークショップは、学生には大変好評であった。それは、従来の講義形式と違う「楽しさ」だけではなく、学生にとって「刺激的」であったことも原因である。教員から見ても、ワークに向かう過程で、学生が自分の頭で考え、他人の意見に耳を傾け、さらなる興味関心を引き出されている様子が見て取れた。また、回数を重ねるごとに、語彙が増える等、自分の意見や感情の伝え方が向上していった。これらは、ワークショップ形式の長所が発揮された結果だと考える。

さらにその長所を、ファシリテーターが存分に生かしていたことも大きい。ワークショップにおいてファシリテーターが果たす役割の重要性を再確認させられた。改めて、講師陣の尽力に感謝したい。

ワークショップの具体的構成・内容は、講師陣に一任したもので、詳細な検討は講師によって行われる予定である。全体を通して立ち会った筆者の印象としては、一部、90分で扱うには盛りだくさんの内容の回があったと感じた。この点はフィードバックしていきたい。

ワークショップの性質上、いわゆる授業時におけるまとめや復習的な部分には、必ずしも重きが置かれていない。もちろん、参加者が持ち帰ってその日の体験を反芻すれば、それでよいのであろうが、評価を伴う授業であることを考えると、学生の理解度を確認し、全員が一定の到達度を共有できるようにすることも必要である。ひとつの方法として、毎回終了時で提出させたふりかえりシートの他に、翌週提出のレポートとして改めて時間をかけて感想や得たものを書かせ、場合によってはさらに発展的な事柄を調べさせる、といった作業を課すこともできよう。これは筆者側の検討課題である。

また、上述の点とも関係するが、講義とワークショップを行う順番も、再考の余地がある。今年度は、主に準備の都合上から授業の後半にワークショップを行った。しかし、先にワークショップを行って気付きを得てから、講義によって知識を習得する、という形式もありうる。講師陣とも相談して、よりよい形式を検討していきたい。

以上のような課題はあるものの、県国際交流協会の協力を得て連続ワークショップを開設できたことは、意義深いことである。第一に、学生への教育効果として、地域への関心を高め、自主的に考え、地域の国際化に貢献できる力を高めることに繋がる。第二に、学外の有為な実践者の力を得ることは、大学の地域との

連携を強める結果をもたらす。さらに、将来的には国際文化学科から地域に向けて多文化共生に関するコンテンツを発信できるようにすることも、視野に入れることができよう。以上の意義を踏まえ、多文化共生社会に貢献できる人材育成のために、次年度もこの取組を継続していく。学外の講師陣と協力して、今後さらに効果を上げるべく、内容・形式に改善を加えていきたい。

¹ 『いわて国際理解ハンドブック 世界はともだち』岩手県国際交流協会・国際協力機構東北支部発行、平成20年。今回実施されたワークの中では「ちがいのちがいがい」が掲載されている。